

沖縄県公文書館移動展について

－平成 16 年度移動展を中心に－

吉 嶺 昭†

はじめに

1 公文書館における展示と当館の展示の位置づけ

1-1 公文書館における展示について

1-2 当館における展示の位置づけ

1-3 移動展の概要

2 多良間移動展（宮古郡多良間村）の事例

2-1 展示概要

2-2 多良間移動展の結果

3 平成 16 年度移動展の事例

3-1 展示構成

3-2 展示準備の体制と主な準備内容

3-3 展示概要

3-3-1 収蔵資料展示

3-3-2 機関紹介展示

3-4 平成 16 年度移動展展示結果

4 考察

4-1 展示への導入

4-2 展示の見せ方

4-3 その他展示結果から

おわりに

はじめに

公文書館¹における普及事業²は、広く一般の方々に公文書館の存在と役割を周知すると共に収蔵資料の利用を促進するためにも必要不可欠な事業となっている。沖縄県公文書館（以下「当館」）でも展示会、講演会、講座、講習会といった種々の普及事業を計画・実施しており、本稿で取り上げる移動展もその一つである。移動展は文字通り公文書館施設外で行う展示会である。³

沖縄県には、東西 1,000km、南北 400km の海域に多くの島々が存在し、沖縄県の約 3 分の 1 市町

† よしみね あきら 財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部公文書専門員

¹ ここでは公文書館とする。

² 当館の普及事業には、常設展、企画展、移動展、歴史講座、公文書講演会、資料保存講習会、映写会、児童対象講座等があり、実施前年度に行事案内リーフレット、ポスターを作成して関係機関や利用者へ配布している。また、大学等でのゼミや県内中学高校の総合的学習での公文書館資料の活用も呼びかけている。

³ 県内では、県立博物館が毎年離島市町村で開催する移動博物館がある。島嶼県であるがゆえに県民に等しく普及するための活動との主旨から始められている。

村が沖縄本島以外の離島市町村である。⁴このような地域的特性から当館を利用する機会の少ない本島周辺離島及び遠隔地在住の方々への普及活動として、平成10年度から移動展を開催し、これまで沖縄本島北部、宮古、八重山など8ヶ所で開催された。開催地域は(表-1)のとおりである。各開催地域での見学者の反応は概ね好評で、距離的な関係上資料の直接的な利用には結びつかない状況はあるものの、当館の存在と収蔵資料についての周知につながったことが見学者の反応やアンケート結果からも伺えた。しかし、「公の施設」として利用者数増を図ることも一方で求められており、移動展が沖縄県の各圏域(遠距離にある沖縄本島北部離島、宮古、八重山圏域)でほぼ開催されたことを確認した上で、開館9年目の平成16年度は、来館者及び利用者の拡大に重点を置き、当館に近く多くの人が集まる那覇市街中心の百貨店で開催することになった。

本稿では、まず公文書館の展示の位置づけ等についてまとめ、次に当館移動展の事例として平成16年度移動展を中心に報告し、開催後のアンケート結果や見学者の反応などから課題等をまとめ、最後に今後の移動展の方向性について考えてみたい。

(表-1)

各圏域別の移動展実施状況(各圏域別に人口の多い順)

圏域	本島・離島別	実施(●)	No.	市町村名	移動展実施年度	人口	人口合計				
南部圏域	沖縄本島	●	1	那覇市	平成16年度	307,764	544,220				
	沖縄本島		2	糸満市		55,743					
	沖縄本島		3	豊見城市		52,487					
	沖縄本島		4	南風原町		33,646					
	沖縄本島		5	東風平町		17,226					
	沖縄本島		6	与那原町		15,203					
	沖縄本島		7	大里村		11,648					
	沖縄本島		8	佐敷町		11,481					
	沖縄本島		9	玉城村		10,486					
	久米島	●	10	久米島町	平成12年度	9,242					
	沖縄本島		11	具志頭村		7,936					
	沖縄本島		12	知念村		5,947					
	南大東島		13	南大東村		1,429					
	座間味島		14	座間味村		1,032					
	粟国島		15	粟国村		995					
	渡嘉敷島		16	渡嘉敷村		775					
	北大東島		17	北大東村		678					
	渡名喜島		18	渡名喜村		502					
中部圏域	沖縄本島		19	沖縄市		124,272	572,032				
			20	浦添市		104,586					
			21	宜野湾市		88,556					
			22	具志川市		63,086					
			23	読谷村		37,114					
			24	西原町		33,557					
			25	北谷町		26,377					
			26	石川市		22,200					
			27	北中城村		16,269					
			28	中城村		15,574					
			29	嘉手納町		13,734					
			30	勝連町		13,530					
			31	与那城町		13,177					
		北部圏域	国頭郡	沖縄本島	●	32		名護市	平成10年度	57,832	125,946
沖縄本島				33	本部町		14,481				
沖縄本島				34	金武町		10,403				
沖縄本島				35	今帰仁村		9,529				
沖縄本島				36	恩納村		9,333				
沖縄本島				37	国頭村		5,629				
伊江島				38	伊江村		5,128				
沖縄本島				39	宜野座村		4,983				
沖縄本島				40	大宜味村		3,308				
沖縄本島				41	東村		1,876				
伊是名島				42	伊是名村	注	1,858				
伊平屋島	●			43	伊平屋村	平成13年度	1,586				
宮古圏域	宮古郡			宮古島	●	44	平良市	平成11年度	34,022	55,458	
				宮古島		45	城辺町		7,042		
		伊良部島		46	伊良部町		6,577				
		宮古島		47	上野村		3,236				
		宮古島		48	下地町		3,200				
		多良間島	●	49	多良間村	平成14年度	1,381				
八重山圏域	八重山郡	石垣島	●	50	石垣市	平成10年度	44,069	49,648			
		竹富島		51	竹富町		3,757				
		与那国島		52	与那国町		1,822				
東京都	東京都	●	53	千代田区	平成13年度	36,035	36,035				

参考)
 沖縄県民手帳に収録の沖縄県の概要の市町村勢一覧(沖縄県統計課作成 平成15年10月1日)を参考にした。
 東京都千代田区の人口は、東京都千代田区のリンク集(www.benri-rink.com)を参考にした。
 注)伊是名村在住の銘苅氏から当館に銘苅家文書の一部が寄贈された経緯から、平成13年度に伊是名村主催で国の重要文化財である銘苅家贈呈記念式典が開催された際に、同資料原本と当館収蔵資料の伊是名関係資料を複製し、式典会場で展示した。

⁴ 平成16年度2月現在、52市町村のうち、18市町村、約3分の1市町村が沖縄本島周辺の離島にある。

1 公文書館における展示と当館の展示の位置づけ

1-1 公文書館における展示について

公文書館の展示に関する各論考からは、社会的に認知度の低い公文書館の存在を周知するのに展示は効果的普及手段であるとした一方で、展示が本来的業務でないと言われ積極的に行われてこなかった原因を主に次のように分析している。①主に一点しかない原資料を扱うため、資料保存管理施設としての機能が重視され資料に与える影響も懸念された。②展示よりもその内容を読む行為が本来の目的である。③業務の中で展示の位置づけが明確でなく、収集・整理・保存といった日常業務と遊離しがちである。④時間と労力を要する割には利用に直結せず成果としても残りにくい。⑤展示を主たる提供手段にしている博物館との違いを余計に分かりにくくし、その存在意義を薄くしている。

当館では、展示を普及事業として明確に位置づけているものの、①から⑤の問題も多少なりともあった。しかし、「公の施設」として存在している以上、県民にとって有益な情報と機能を有していることを周知し、それを理解してもらうための働きかけは必要である。昨今、公文書館の社会的認知度を上げることに盛んに議論されている。

秋田県公文書館の柴田氏は、普及活動に「理解者層拡大」と「利用者層拡大」の2つの目的を設定し、図書館、博物館、公文書館の理解者層と利用者層の広がりを示した概念図から、図書館、博物館の理解者層は、ほぼ社会全体に広がっているのに対し、公文書館の理解者層の広がりには小さく、利用者層の広がりにも影響しているとし、公文書館の普及活動は、理解者層と利用者層の両方の拡大を目的に行わなければならないとしている。⁵

大分県立先哲史料館の鹿毛氏は、「フリーサービス」の充実度という視点から図書館、博物館、文書館を比較している。「フリーサービス」とは、利用者が特定の意識や目的を持つことなく、その施設に足を運ぶだけで気軽に受けるサービスとしており、文書館は、図書館や博物館に比べて、入館するといきなり高い次元の「対人サービス」に直面するため、利用者から見た文書館は、「敷居の高い」施設であると分析している。⁶一般に敷居の高いと言われる公文書館を広く一般県民に理解してもらうためには、その導入口であり自由に観覧できる展示空間の充実も重要であろう。展示は利用に直結しない傾向があるが、まだ社会的に公文書館の存在意義が認識されていない状況の中、興味や関心の有無に拘らず、まずは多くの人に公文書館と収蔵資料を宣伝し、公文書館を認知してもらうことが先だろうと考える。

1-2 当館における展示の位置づけ

公文書館法を根拠とする「沖縄県公文書館の設置及び管理に関する条例」⁷の（設置）第1条では、「歴史資料として貴重な公文書等その他の記録（以下「公文書等」という。）を収集し、整理し、及び保存するとともに、これらの利用を図り、もって学術及び文化の振興に寄与することを目的として、沖縄県公文書館を設置する。」としている。同条例中（業務）第3条でも、第1項に「公文書等

⁵ 柴田知彰「記録史料の展示に関する一試論」『秋田県公文書館研究紀要 第3号』（秋田県公文書館 1997）pp. 42-45

⁶ 鹿毛敏夫「文書館展示のアイデンティティー記録史料展示の理論と実践一」『史料館研究紀要 第6号』（大分県立先哲史料館 2003）pp. 13-15

⁷ 「沖縄県公文書館の設置及び管理に関する条例」（1995年3月31日条例第6号）〔沿革〕1996年3月31日条例第4号改正

の収集、整理及び保存に関すること」第2項に「公文書等の閲覧、展示その他の利用に関すること」と保存と利用が並列に同等な位置づけになっており、閲覧は勿論のこと展示も利用に含めている。⁸

これら公文書館業務を行う財団の組織⁹も、主に第1項の収集・整理事業を所掌する資料第2課と主に第2項の閲覧普及事業を所掌する資料第1課に分かれており、展示は主に資料第1課の業務である。¹⁰

また、当館業務の運営方針に「業務基本体系」がある。同基本体系には「県民が利用しやすい公文書館を目指すとともに普及活動を積極的に展開する」という施策があり、その具体的事業に展示会、講演会、講座の開催がある。このように条例等からも、当館を県民に利用してもらうために展示を含めた普及活動の重要性が明確に示されている。

講演、講座は、限られた時間枠の中で行われ、関心の高い層で占める割合が高いのに対し、展示は、幅広い層の人に見てもらえる可能性が高い。見学者が思い思いの視点で自由に見ることができる面で公文書館認知への入り口的役割も担っている。移動展は、当館を訪れたことのない人も含め積極的な働きかけができることから、当館の認知者層の幅を広げ潜在的利用者の開拓にもつながる有効な普及手段といえるだろう。

1-3 移動展の概要

移動展の開催状況は、(表-2)のとおりである。移動展の開催地選びは、地元の要請も検討しながら決定した。また、多くの人に展示を見てもらうため、開催地の行事に合わせたり、展示や開催地の市町村や機関との共催で行われたのも特徴である。主な作業分担として、資料選択、キャプション解説作成、チラシ・ポスター、展示用複製資料作成は当館、会場の提供と開催地域での広報活動は開催地側機関、開催地での展示作業は協同で行った。展示資料の選択をする際は、開催地の意見も積極的に取り入れた。沖縄県は地域史研究も盛んな地域である。¹¹ 展示資料選択や情報提供など地元市町村市史関係者等の協力も移動展準備の大きな手助けとなっている。また、展示資料に関する情報提供や資料提供など予想以上の成果を得ており、移動展は開催地との交流の場にもなっている。¹²

⁸ 当館では、入館者の他、移動展などの館外行事、レファレンス（来館以外含む）、ホームページも利用者数として数えている。

⁹ 県は、平成8年4月1日に資料収集・整理・保存・閲覧等の公文書館業務（公権力行使業務を除く）を財団法人沖縄県文化振興会へ委託した。

¹⁰ 資料第1課の所掌業務は、保存・修復業務・収蔵資料のマイクロ化業務も含む。また、次年度平成17年度特別企画展は、資料第2課が担当する予定である。

¹¹ 本県には、各市町村史（誌）の編集に携わる機関等及び関係者相互の情報交換・親睦を図る目的に設立された沖縄県地域史協議会がある。同会発行の会誌（2004年6月発行）によると、44の市町村字史等の機関会員と61人の一般会員で構成されている。

¹² 久部良和子「公文書館の利用と普及（移動展の役割）～八重山・名護・宮古の事例より」『沖縄県公文書館研究紀要 第2号』（沖縄県公文書館2000）では、移動展を通じての課題や成果等について報告している。また、馴染みにくいとされる公文書館を積極的に売り込み、公文書館資料の使い方の見本も示す必要があるとしている。

(表-2)

移動展開催状況

開催年度	展示会名	会期	開催場所	見学者数
平成10年度	第1回移動展 「八重山の資料を中心に」	1998/3/20～3/30	石垣市立図書館	742
	第2回移動展 「記録された名護・やんばる」(注1)	1999/3/20～3/31	名護市立図書館	8,364
平成11年度	第2回移動展 「記録された名護・やんばる」(注1)	1999/4/1～4/18	名護市立図書館	15,555
	第3回移動展 「公文書館資料にみる海外移民の軌跡と宮古関係資料」(注2)	1999/11/2～11/28	平良市総合博物館	1,350
平成12年度	第4回移動展 「沖縄県公文書館収蔵資料にみる久米島」	2000/11/1～12/3	久米島自然文化センター	4,016
平成13年度	第5回移動展 「沖縄県公文書館資料に見る伊平屋」	2001/12/1～12/16	伊平屋村歴史民俗資料館	600
	第6回移動展 「写真に見る近代の沖縄」(注3)	2002/2/22～2/23	法政大学ボアソナータワー	142
平成14年度	日本復帰30周年記念特別展宮古移動展「資料に見る沖縄の歴史」(注4)	2002/6/11～6/23	平良市総合博物館	603
	日本復帰30周年記念特別展八重山移動展「資料に見る沖縄の歴史」(注4)	2002/7/2～7/14	石垣市立図書館	1,116
平成15年度	第7回移動展 「沖縄県公文書館収蔵資料に見る多良間」	2003/9/4～9/15	多良間村中央公民館	538
平成16年度	第8回移動展 「アーカイブズへの誘い～記録で迎える那覇の今・昔」	2004/12/1～12/6	那覇市パレットくもじ7階リウボウホール	2,275

注1) 「記録された名護・やんばる」は、平成10年度、11年度に渡って開催。期間中の総人数は23,919人

注2) 沖縄県公文書館で開催した企画展「公文書館資料にみる海外移民の軌跡」の展示資料に宮古関係資料を加えて展示。

注3) 沖縄県公文書館で開催した企画展「写真に見る近代の沖縄」を東京移動展として展示。

注4) 沖縄県の日本復帰30周年を記念した展示会で、沖縄県公文書館での展示資料を一部複製資料に替えて宮古・八重山でも展示。

(参考 表-3)

普及展開催状況

開催年度	展示会名	会期	開催場所
平成13年度	第1回普及展 「公文書から歴史資料へ～沖縄県公文書館の役割～」	2001/7/16～7/19	沖縄県庁県民ホール
	第2回普及展 「公文書から歴史資料へ～沖縄県公文書館の役割～」	2001/11/28～12/7	宮古支庁八重干瀬ホール
	第3回普及展 「公文書から歴史資料へ～沖縄県公文書館の役割～」	2001/11/29～12/7	八重山支庁石礁ホール
平成14年度	第4回普及展 「公文書から歴史資料へ～沖縄県公文書館の役割～」	2002/7/29～8/5	沖縄県北部合同庁舎
	第5回普及展 「歴史の証としての公文書～県民共有の財産を後世へ引き継ぐために～」	2002/12/2～12/6	沖縄県庁県民ホール

注5) 普及展は、行政への普及活動として行われたもので、行政へのアプローチとしての展示会ということで参考までに表記した。

注6) 普及展は、行政機関のオープンスペースでの展示のため、見学者数は数えていない。

注7) 普及展は、主に資料第2課が担当した。

主に移動展の展示構成は、①公文書館の役割・業務内容を紹介する機関紹介展示、②開催地域に関する収蔵資料紹介展示の2部構成とした。

移動展は当初、企画展終了後の資料を再度展示する方向で考えられていたが、多くの人に関心を持ってもらい公文書館の収蔵資料を理解してもらうため、改めて全ての収蔵資料群を対象に、特に地元の関心を引きやすい開催地域に関する資料を中心に構成した。開催場所は、主に地元の資料館や公民館等の公共施設を使用した。保存環境や展示期間中の管理面から展示資料の多くが複製資料になった。逆に複製資料により、見学者が気軽に手にとって閲覧することもできた。

(多良間移動展の様子 参照)

複製作成が手軽にできる点や地元の関心も高いことから写真資料を多く展示したのも移動展の特徴である。当館は、米国国立公文書館から沖縄占領統治関係資料を収集しており、その中には戦中・戦後の沖縄関係写真がある。30年から60年程前の写真で、戦時中の様子や戦後の琉球列島米国民政府（以下「USCAR」）¹³の高官が各離島などを視察した様子に加え、多くの沖縄住民も写されている。地元の懐かしい風景や人々、現在もご健在の方々が写っているため、見学者から「写真を複製して手元に置きたい」との要望と共に写真資料に関する情報も度々寄せられ関心の高さが際だった。そのためか、身近な資料が当館に収蔵されているとの印象を持った方も多かったようである。



多良間移動展の様子

2 多良間移動展（宮古郡多良間村）の事例

平成15年度移動展開催地の多良間島は、宮古島と石垣島の間程に位置する面積19.39km²の楕円形の島である。移動展は、島で一番盛大な伝統行事である豊年祭「八月踊り」の開催時期、9月4日から6日に合わせて、同月4日から15日までの12日間、多良間村中央公民館で開催された。¹⁴（うち、1.5日は台風接近により閉館）

2-1 展示概要

展示資料の選定を村と調整し、琉球王国時代から復帰前の資料を中心に、多良間の史実に関連する資料でかつ関心の高いと思われる資料を選択していった。結果、「多良間の空中写真と地図」、「戦前の多良間関係資料」、「米軍統治時代の多良間関係資料」、「その他の多良間関係資料－復帰後－」の順に構成し、地図・空中写真6点、文書等45点、写真65点の計116点全てを複製で展示した。展示概要は次のとおりである。

¹³ USCAR は、琉球政府の上位機関であった米国側の政府機関。沖縄の占領行政に関与した米国政府機関を出处とする公文書も含め、当館では、米国収集資料（USCAR 文書）と総称している。米国国立公文書館を中心に米国国務省や国防省の沖縄関係の公文書、写真、映像資料も収集している。

¹⁴ 八月踊りの奉納舞台は、国の重要無形文化財にも指定されており、毎年の祭りに向けて村民の多くが練習を重ね、島内外の村出身者及び観光客もこの祭を見学に来島する。多良間村は、沖縄県内でも琉球王国時代の古文書が多く残る地域である。

(多良間の空中写真と地図)

空中写真と地図は、土地の様相を一目で概観できる他、時系列に並べて展示することで土地の変遷も比較できるため、より関心を引きやすい資料である。多良間移動展では、1945年(昭和20)の米軍撮影空中写真や米軍の作戦地図、江戸幕府の正保、元禄、天保国絵図の一部を展示した。¹⁵

(展示点数：6点)

(戦前の多良間関係資料)

戦前の県文書や行政刊行物から多良間村の概要や燐炭調査についての報告書、戦前の刊行物から多良間の婚姻・風俗、年中行事に関する資料、沖縄を調査に訪れた社会人類学者の河村只雄の日記及び多良間の伝統行事「スツウプナカ(節祭)」の様子を撮影した写真を展示した。

(展示点数：14点)

(米軍統治時代の多良間関係資料)

米軍統治時代の資料は、当館でも大きな割合を占める。USCAR文書から米国高官が多良間を訪れた際の写真資料とUSCAR高等弁務官宛の空港整備と航空機誘致を求める陳情書、琉球政府文書(以下「琉政文書」)¹⁶から多良間の道路、水道、港湾、学校等の公共事業、糖業関係、農作物の病害虫防除(野鼠天敵イタチ導入計画など)、台風等災害対策援助、離島振興計画などを展示した。

(展示点数：91点)

(その他の多良間関係資料－復帰後－)

行政刊行物から多良間に関する資料を展示した。(展示点数5点)

(沖縄県公文書館紹介)

機関紹介展示では、当館の施設と役割及び業務内容、当館収蔵資料群、利用普及(閲覧室の利用、普及行事)、当館ホームページ(以下「HP」)を紹介するパネルを展示した。また、当館発行刊行物を自由に見てもらおうための閲覧コーナーを設けた。

2-2 多良間移動展の結果

これまでの移動展同様に米国統治時代の沖縄関係写真資料に注目が集まった。村民、村出身者が写っており、写真の複製を希望される方も多かった。

一年中で最も人が集まる時期に移動展を開催したが、祭りを目的に来島された方が多いせいや期待した程の見学者数ではなかった。(538人)しかし、祭りをきっかけに村内外から見学者が訪れ、祭りを取材に来た新聞社、テレビ局等のマスコミが移動展を取り上げてくれるなど、イベント時期に合わせた展示会は当館をPRするのにも効果があった。移動展終了後に村からの依頼を受け、複製資料の一部を村へ寄贈した。2003年(平成15)10月10日の新多良間空港開港時には、空港ロビーで複製資料も展示され、資料の有効活用と公文書館の存在を周知することにも結びついたように思う。

¹⁵ 他機関所蔵資料を複製及び展示する際は、所蔵機関への許諾を取った。

¹⁶ 琉球政府は、1952年(昭和27)から1972年(昭和47)までの沖縄側の政府機構であるが、当館では、戦後1945年(昭和20)から1972年(昭和47)(復帰前)までの沖縄側行政府の文書も含めて琉球政府文書と総称している。

3 平成 16 年度移動展の事例

前述のとおり、展示を多くの人に見てもらおうと共に当館への来館と収蔵資料の利用促進へとつなげるために、那覇市内百貨店で移動展を開催することになった。

開催場所の百貨店は、「奇跡の一マイル」と称され、戦後の奇跡的發展を遂げた国際通り付近に立地している。周辺は、商業施設や企業が多く建ち並び県庁も所在する那覇市街の中心地である。戦前の国際通りは、湿地が広がる郊外の県道であったが、1952年（昭和27）から1954年（昭和29）に改修され、その後発展して一大繁華街となった。¹⁷ 那覇中心市街地から少し離れた場所に米軍返還跡地利用で開発と発展が進む那覇新都心地区があるが、今なお同百貨店周辺は、沖縄の経済と行政活動の中心地である。当館から同百貨店までは、距離にしておよそ3kmで、車で20分程と比較的近く、移動展の効果で新たな来館者も期待できると考えた。

展示会場は、百貨店内のイベントホールで広さは115.2㎡である。展示会、上映会、各種イベントに利用できる貸しホールで、上映会の際はホール内に階段式の席を配置し、ホール奥スクリーンに映像が写し出される仕組みになっている。

今回の移動展は、百貨店が賑わいを見せる12月の歳末時期に設定したため、より多くの人に見てもらえることが期待できた。

3-1 展示構成

（展示タイトル）

より誘客につながるようなインパクトのある展示タイトルを館内で検討し、テレビなどでも最近耳にするようになった歴史資料またはそれを保存・管理している施設（公文書館等）を指す「アーカイブズ」（Archives）¹⁸の用語を使用し、展示タイトルを「アーカイブズへの^{いざな}誘い」とした。また、サブタイトルを「記録で辿る那覇の^{いま}今・^{むかし}昔」とし、これまで同様に展示会場地域に関する収蔵資料展示と当館を紹介する機関紹介展示で構成した。

（展示計画）

収蔵資料展示は、沖縄の政治・経済等の中心的役割を担ってきた那覇がどのような変遷を辿ったかを感じてもらい、現在との比較もできるような通史展示とした。

展示構成は、入り口の導入箇所に（Ⅰ）那覇の空中写真、メインの展示ホール内に（Ⅱ）琉球王国時代の那覇、（Ⅲ）近代の那覇（廃藩置県後から沖縄戦まで）、（Ⅳ）戦後の那覇の順に空中写真と3つの時代区分に分け、各時代の那覇に関する資料を選択することにした。また、次の要素を展示に取り入れることにした。

①写真資料を現在の写真と対比させて見せる。

過去の展示会でも現在との対比で見たいとの要望が度々あった。現在との関わりで見ること、過去のものと思われがちな資料がより身近な資料との認識へと近づくとされる。ある程度場所が特定できる写真資料は、現在の様子と対比させた見せ方を試みることにした。¹⁹

②展示会場の雰囲気盛り上げる。（写真1）

展示資料の中から、各時代の絵図及び写真の画像にBGMを付け、歴史を回想するようなイメージDVDを作成し、自動再生で展示ホール奥スクリーンで繰り返し放映することで見学意欲を盛

¹⁷ 参考資料：大濱聡『沖縄国際通り物語 -「奇跡」と呼ばれた一マイル-』（ゆい出版1998年）

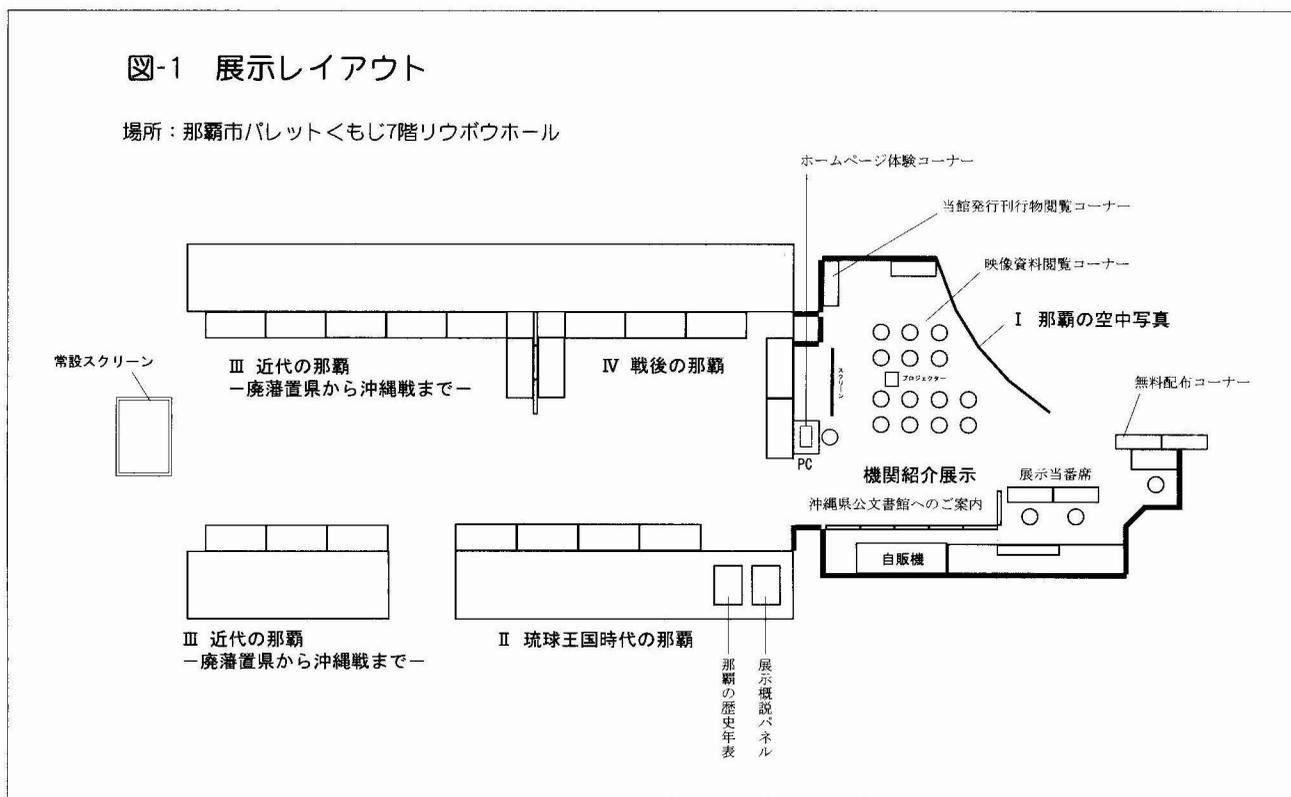
¹⁸ アーカイブズは、組織の記録を保存・管理する施設でもある。

¹⁹ 現在地付近の写真撮影では、具志頭村立歴史民族資料館の武智氏にも協力いただいた。

り上げる効果を狙った。

③公文書館を体験するような雰囲気にする。

機関紹介展示で公文書館の役割と収蔵資料を紹介したパネルを展示する他、公文書館に親しんでもらうために、収蔵資料の検索ができるHP体験コーナー、映像資料閲覧コーナー、当館発行刊行物閲覧コーナーを設置することにした。(図-1)



3-2 展示準備の体制と主な準備内容

展示を所掌する資料第1課を中心に準備を進めた。主に担当者で展示構成と候補資料を選定し、館内調整等で最終的な展示資料を決定後に資料解説、図録の編集作業に取りかかった。展示目録の作成、図録、キャプション等の最終原稿の加筆修正を資料第1課内で行い、収集・整理業務を所掌する資料第2課の専門員にも原稿確認と一部原稿の作成を依頼した。²⁰

また、広報活動、複製物作成(展示パネル、複製資料)、閲覧用映像資料の選定・編集、展示資料の保護処置(保存箱作成等)、一部資料の原資料所蔵元への複製・展示の許諾、展示ケース等機材設備の賃借を資料第1課内で分担した。(インターネット回線の手続きの一部を資料第2課が担当した。)移動展前日の展示準備は、公文書館友の会ボランティアにも協力いただいた。展示当番は資料第1、2課と友の会でローテーションを組み、常時2、3人体制で早番、遅番当番で対応することにした。その準備等の一部を紹介する。

(展示資料の選択)

具体的な展示構成を立てる前に収蔵資料を一様に調査しなければならない。手始めに収蔵資料検索システムから那覇や那覇に関する文字をキーワードに関係資料を抽出し、その中から那覇の歴史

²⁰ 図録の一部校正等で(財)沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室主任専門員の小野まさ子氏にも協力いただいた。

を特徴づけるような資料に絞り込み、主要なテーマにグルーピングしていった。経済、行政等の中心地として栄えた那覇の歴史は、沖縄の主要な歴史とも重なるため、那覇の歴史に沿うように留意した。展示候補目録を作成後に資料を直接見ながら内容を確認し、展示の際の視覚的な面、個人情報、資料の状態についても確認を行い、最終的に展示ケース（W150cm × D60cm × H95cm）19 台に 69 点（うち原資料 66 点）、壁面に 79 点（全て複製）、計 148 点を展示することにした。過去の移動展は、展示環境の問題から複製資料を中心としたが、開催時期の 12 月は湿度も比較的低温、展示ホール内の環境や 6 日間の短期の展示期間を考慮した結果、原資料を多く展示することにした。公文書館で保存・利用に供している資料を具体的に伝えるためにも可能な限り原資料を見てもらうことは必要だろう。

（展示図録）

展示図録は、1,500 部作成した。図録中の目録には、展示No、展示資料名、年代、収蔵資料の請求番号にあたる資料コードを明記した。資料の一部を複製して展示したものは、展示資料名の後に出典を明記した。また、展示後に資料の利用が円滑にできるように展示キャプションにも出典や資料コードを明記した。

（原資料所蔵元への許諾）

当館収蔵資料には、機関または個人所蔵の原資料を複製で収集したものがある。今回はその一部を展示に使用したため、複製または展示する場合に必要な許諾を所蔵元より取った。

（広報活動）

ポスター 500 枚、チラシ 2,000 枚を作成し、関係機関等へ配布した。ポスターは県の南部土木事務所管理の屋外公共掲示板を活用し、主要な道路にある比較的目に付きやすいバス停や交差点付近の掲示板にポスターを掲示した。併せてテレビ、ラジオでの広報も行い、地元 NHK 沖縄のニュース番組の特集では移動展を紹介してもらった。²¹

（複製物作成）

展示概要、通史年表、文書資料に関連する補足説明パネルや写真資料、地図、絵図、新聞記事など壁面に展示する複製資料は、展示スペースに合わせて館内で作成した。移動展は、当館から離れた場所での開催のため、現場で複製資料を展示して確認することも難しい。実際の展示イメージも仮想し、当然であるが綿密に展示計画を立てる必要がある。²²

3-3 展示概要

3-3-1 収蔵資料展示

展示ホール内は、各展示ケースと背中合わせの壁面にできるだけ関連する資料を展示した。展示ケースが文書資料中心であるのに対し、壁面には、視覚的にも一目で認識しやすく見る側の関心を引くのに効果的な写真、刊行物の挿し絵、地図、絵図、図面、新聞資料を中心に展示した。各時代

²¹ 当館では 1 年間、NHK 沖縄の午後 6 時からの地元ニュース番組の特集コーナーで、公文書館が収集した米軍や USCAR 撮影の米国国立公文書館沖縄関係写真や琉球政府広報課が 1952 年（昭和 27）から 1972 年（昭和 47）にかけて撮影した琉球政府関係写真などを毎回テーマを設定し、資料第 2 課の担当専門員が写真とその時代背景について紹介している。「お尋ねしますこの 1 枚」という詳細不明な写真に関する情報提供を呼びかけるコーナーでは、放送後直ぐに電話が入る程の反響振りである。アンケートの結果でもテレビで知ったという見学者も多く、テレビの広報効果の高さを実感した。

²² 展示作業の際に、展示スペースの割に複製資料のサイズが小さいものが数点確認され、再度適当なサイズで作成し直した。

毎の展示構成と展示資料の概要は次のとおりである。

I 那覇の空中写真（写真 2, 3）

展示ホールへの誘客効果を高めるため、展示会場入り口のガラス壁面に 1945 年（昭和 20）、1972 年（昭和 47）、2003 年（平成 15）の那覇市街地全体が俯瞰できる空中写真 3 枚を展示した。同じ撮影範囲でかつ同縮尺で拡大複製し、沖縄戦中、日本復帰直後、そして現在と那覇市街地の変遷を一目で対比出来るようにした。

II 琉球王国時代の那覇（写真 4）

（中国と琉球との交流）

中国と琉球の外交文書である^{とうあん}档案資料から、琉球王国の貿易の窓口として栄えた那覇を伺い知ることができる資料を展示した。

（^{わたんじむら}渡地村関係資料）

渡地村は那覇港近くにあった那覇の一行政区。琉球王府から渡地村へ廻ってきた通達文書の写しからは、琉球王府が欧米などの異国船の往来を警戒していた様子が記されている。

毎年 5 月 3 日から 5 日に那覇泊港で開催される那覇ハーリー祭りでお馴染みの^{はりゅうせん}爬竜船競争があるが、その^{はりゅうせん}波龍舟（該当文書の表記による）関係資料も展示した。

（異国船の来琉）

島津家文書から 19 世紀の那覇の港に頻繁に来琉していた欧米の異国船の漂着図を展示した。

III 近代の那覇－廃藩置県後から沖縄戦まで－（写真 5, 6）

（廃藩置県後の那覇）

1879 年（明治 12）の廃藩置県後に赴任した第 2 代県令上杉茂憲の日記や 1908 年（明治 41）の島嶼町村制施行前の各行政区界を間切りと表記していた頃の沖縄県管内全図、活況を呈していた那覇の市場の図、那覇港の修築に関する資料や沖縄（那覇）～本土間の航路を独占していた大阪商船の航路案内パンフレット、「沖縄県振興 15 ヶ年計画」を策定した第 22 代県知事井野次郎の事務引継書から当時那覇を起点に走っていた県営鉄道や銀行の経営状況が伺える部分、併せて廃藩置県後の学校教育に関する資料や学校関係写真などを展示した。当時の世情や雰囲気や伝わるような絵図、挿し絵、商業都市那覇が伺える写真資料も壁面に展示した。

（沖縄戦時下の那覇）

1944 年（昭和 19）10 月 10 日の沖縄戦開始直前に米国艦載機の攻撃を受ける那覇を撮影した空中写真（斜め写真）と台風を隠れみのに南西諸島へ接近し、那覇への奇襲攻撃を行った米国空母艦隊の攻撃に関する米国側の報告書を展示した。²³

IV 戦後の那覇（写真 7, 8）

（復興期の那覇）

那覇の復興計画に関する米国軍政府と沖縄諮詢会、沖縄民政府との会議録を展示した。また、戦後作成された土地所有申請書（開催地の那覇市牧志に関する簿冊）²⁴も展示した。土地所有申請書は、現在も土地の確認や裁判での証拠書類として利用されるなど利用頻度の高い資料である。

²³ 那覇での移動展開催の年は、那覇空襲（十・十空襲）の年から 60 年目にあたり、那覇市各地で空襲に関する行事やシンポジウム等も開かれた。

²⁴ 米軍は、沖縄の統治政策を進めるにあたり、沖縄戦により消失した土地の公図・公簿を再整備するため、米国軍政府の指令により各市町村に土地の証明書である土地所有申請書を作成させた。

(那覇の都市計画)

米軍政府のシーツ軍政長官が「那覇を戦前以上の繁華街にする」と発表した新聞記事と具体化する那覇の都市計画に関する資料を展示した。また、那覇市長から琉球列島米国民政府あてに申請された那覇都市計画事業関係書類、1954年(昭和29)の首里市・小禄村・那覇市の市町村合併に関する書類、開催地付近の国際通りの拡幅工事に関する図面や最近まで国際通りにあった百貨店「山形屋」の外資導入免許関係書類など現在の那覇の街作りに深く関わった資料を展示した。また、戦後の琉球政府広報課撮影の写真資料も壁面に展示した。

3-3-2 機関紹介展示

(沖縄県公文書館へのご案内) (写真9)

公文書保存の重要性と公文書館の役割についての説明パネルを先頭に、公文書等の利用、収蔵資料群の紹介、閲覧室のご案内、各種普及事業とHPの紹介パネルを掲示した。

(ホームページ体験コーナー) (写真10)

当館HPは、ネットOPA²⁵の愛称で1998年(平成10)7月1日からサービスを開始している。収蔵資料の検索が可能で、来館前の事前調査での活用や電子閲覧室、電子出版などの画像コンテンツも閲覧できることを周知する目的でインターネットを開設し、自由に見て触れてもらうためのパソコン1台を設置した。

(当館発行刊行物閲覧コーナー)

当館発行の資料目録、過去の展示会図録、研究紀要、沖縄県公文書館だより「アーカイブズ」等を自由に閲覧できるコーナーを設けた。

(映像資料閲覧コーナー) (写真11)

沖縄県公文書館普及ビデオ、戦前、戦後の沖縄の風景風物の記録映像、米軍作成の沖縄戦映像、USCAR作成の記録映像ビデオを放映した。²⁶

(無料配布コーナー)

当館のリーフレット、利用の手引き、沖縄県公文書館だより「アーカイブズ」、移動展チラシを自由に持ち帰ってもらえるように必要部数置いた。なお、移動展図録は案内カウンターにて展示当番が来場者1名に各1部ずつ無料配布した。²⁷

²⁵ <http://www.archives.pref.Okinawa.jp>

²⁶ 展示当番の際、ビデオテープを頻繁に入替することのないように、関係する映像毎に1本のビデオテープに編集してまとめた。

²⁷ 開催時の見学者の人数に対して図録の部数は不足していたので、後半は希望者のみに配布した。

平成 16 年度沖縄県公文書館移動展の様子



展示ホールの様子



写真 1
展示ホール奥スクリーンでBGM付きのDVD映像を放映



写真 2 I 那覇の空中写真
1945年米軍撮影、1970年琉球政府撮影、2003年撮影の空中写真を掲示し、今と昔を対比させて見せた。



写真 3



写真 4 II 琉球王国時代の那覇



写真 5 III 近代の那覇
— 廃藩置県から沖縄戦まで —



写真 6



写真 7 IV 戦後の那覇



写真 8



写真 9 沖縄県公文書館へのご案内



写真 10 ホームページ体験コーナー



写真 11 映像資料閲覧コーナー

3-4 平成 16 年度移動展展示結果

那覇市街中心百貨店での開催も幸いし、展示会場には多数の見学者が訪れた。開催時期の12月は特に買い物客も多い時期であり、不特定多数の人に当館を周知する上で場所と時期共に最適だった。

(開催期間)

展示準備、平成 16 年 12 月 1 日 (水) ~ 12 月 6 日 (月) 午前 10 時~午後 8 時 (最終日の 6 日は午後 6 時まで)

(見学者数)

- ・ 12 月 1 日 (水) 248 人
- ・ 12 月 2 日 (木) 317 人
- ・ 12 月 3 日 (金) 308 人
- ・ 12 月 4 日 (土) 584 人
- ・ 12 月 5 日 (日) 443 人
- ・ 12 月 6 日 (月) 375 人 合計 2,275 人

(アンケート結果)

アンケート回収率は、見学者数の 8% (183 枚) であった。細かい分析までは至らなかったが、アンケートの質問内容と結果について報告する。

(どちらからいらっしゃいましたか?)

那覇市が全体の 61%、圏域では南部 72%、中部 15%と開催地に近い場所からの見学者が大半を占めた。

(この展示会を何で知りましたか?)

新聞、ポスター・チラシ、テレビの順に多かった。新聞、テレビとも事前の広報とマスコミ取材での紹介記事等で知ったとの回答が多かった。また、ポスター・チラシで知った割合が過去の展示会と比較しても多いように感じた。県の屋外掲示板へのポスター掲示も、効果があったと思われる。テレビで移動展が紹介された後に見学者が増える傾向が見られた。マスコミを通じての宣伝効果は高いことを実感した。また、直接会場へ来て知ったという割合も高く、百貨店という場所柄、来店ついでに見た方も多いと思われ、結果的に当館認知につながったように思う。

(今回の展示について)

大変良い、良いを合わせて 91%と概ね良い結果が得られた。

(沖縄県公文書館の役割と収蔵資料について理解できましたか?)

理解できた、なんとなく理解できたを合わせて 98%と、結果では、当館の理解者増につながった。その後の来館についても問うために、アンケート項目に「公文書館を利用したことがありますか」「公文書館を利用したいと思いますか」も加えるべきだった。

(年齢)

見学者の年齢層は高い。20代は7%と全体的に低い結果となった。しかし実際は、百貨店ともあって幅広い世代の人が通りがかりに見学する光景が見られた。

(職業)

会社員の割合が最も高かった。当館年報の利用者層の結果でも会社員の割合は高い。那覇市内の中心部で企業等も多く集中し、入場時間も午後8時までとしたことで、就業後に来場した方もいたと思われる。退職後の60代以上の無職の方や主婦の多さも目立った。また、学生の割合は低かった。

(性別)

6:4の割合で男性がやや多かった。会場の様子を見る限りは、男女の偏りは無かったように感じた。

(展示のご感想、希望及び公文書館への要望等から)

「親しみやすい展示だった」「古きを知り今があることを実感した」「戦争で多くの建物などが破壊され残念である」「琉球王国時代から戦後までの様子を見て、自然を破壊する力と開発する力の矛盾した力の偉大さを知った」など、時代の変遷を辿るような通史展示は、共感を呼びやすい印象を受けた。²⁸

また、「昔と今の変化が分かりやすく展示されていた」「写真で那覇の町並みの変化を辿ることが出来た」「今・昔の比較がとても分かりやすかった」「新、旧対象の写真で昔と現在の場所が分かりとても懐かしかった」など、今との比較でより資料の魅力を引き出すことができた。また、「自分の家や遊んだ場所が写っており懐かしかった」「現在の地図も対比させて見たい」の他、現在地付近の写真の位置についての意見もあった。写真資料の反応は良く、新たな情報や感想、意見も多く寄せられた。また、当時を知る方々は、写真に記録された状況を鮮明に記憶しており、体験に基づいた貴重な情報提供もあった。(資料に関する情報等参照)

沖縄戦と戦前の沖縄の風景・風物等の記録映像は関心が高かった。沖縄戦の映像は全て英語のナレーションだったが、(日本語訳を付けて欲しいとの要望も多かった)沖縄上陸作戦の様子などインパクトのある映像で多くの人が集まった。「公文書館は文書が主だと思うが、絵や写真の方が興味を惹かれる」「文書だけでなく、写真、映像資料までも後世へ伝えるべく保存されているのを知った」という感想からは、公文書館は文書を保存する所というイメージが少なからずあるように感じた。

「展示点数が少ない」「展示資料の詳細な説明が欲しい」という意見もあった。「展示を頻繁に行って欲しい」「公文書館は交通の面で不便であるため、このような都市部の繁華街で開催すれば気軽に見に行ける」「公文書館でもこのような展示会を望む」との意見もあり、一般には展示で見たいとの希望が多いように感じた。また、「展示はいつまで開催しているのか」との質問が度々あり、展示を見逃すと見る機会を失うと思われるようにも見受けられ、展示資料が利用できることの説明が

²⁸ 沖縄の歴史を表現する時に「唐の世から大和の世、大和の世からアメリカ世、アメリカ世から大和の世」と沖縄が常に外からの影響を受け、今日に至っていることを表現する言葉がある。沖縄が日本本土と違う歴史を歩んできたことが県民全体の意識の中に少なからずあると思ひ、このような歴史的背景の中で資料を位置づける展示は、資料価値の再認識にもなると考えた。

足りなかったと感じた。「写真や地図のコピーが欲しい」と要望される方もおり、その際は、展示資料は当館でも利用できること。一部複写も可能であることを伝えた。

「公文書館は敷居の高い感じがしたが、興味のある資料もあり、今度祖母を連れて行ってみたい」「公文書館は堅いイメージなのでこういう風に人の目に触れる機会があると良い」「公文書館は自分に関係ないイメージだったが、今回の展示会を見て行ってみたいと思った」「移動展で、公文書館がどのような所であるかを知った」「公文書館へ行ったことがないので場所を教えて欲しい」「今回の移動展で公文書館の活動を初めて知った」「公文書館の活動等を理解してもらうためには、このような移動展を積極的に行うべき」という感想の他、展示を見た後に資料の提供を希望する方もいた。まだ一般には馴染みがない施設で役割についても理解されていないとの一面が伺えた反面、移動展を通じて当館の認知にもつながったこと、理解されるためには常に移動展などの普及活動で外との接点を持つことが必要であることを実感した。²⁹

広報不足を指摘する意見も多く、「貴重な資料をもっと多くの人に見てもらうために広報すべき」「学校との連携で、楽しい社会見学に使って欲しい」との提案もあった。また、当館展示室での開催と思った方が来館されるケースもあった。

2005年（平成17）は、戦後60年目の年であり、次回の展示会で記念展示会を期待しているとの意見もあった。時期にあった展示は見学意欲を盛り上げる上で効果が高いと思われる。

移動展終了後、当館で展示資料を閲覧し、複写する利用者もいたが、大半は資料を利用したいという意識よりも展示で見ることを希望している方が多い印象を受けた。収蔵資料の閲覧利用を促すという当館の希望に対し、見学者の見方の違いを垣間見ることができた。

4 考察

移動展は、一般の人が公文書館をどう捉えているか、何を求めているかなど会場での見学者の反応や声を直接感じ取ることができる県民との接点の場である。

次に、平成16年度移動展のアンケート結果や会場の反応を通しての所見と次回の移動展に向けた方策を考えてみたい。

4-1 展示への導入

（広報活動）

誘客を促進するためにも広報活動が重要であることは言うまでもない。具体的な方策についてはまだ考えつかないが、会社団体、NPOやボランティア団体³⁰、地元公民館、関心ある個人等への広報、マスコミ等への呼びかけと活用、学校での総合的学習での活用の呼びかけ、広報手段と方法も今後検討していく必要があるだろう。また、会場の百貨店付近は観光客も多く訪れる。特に開催時期の12月は、県外の修学旅行生の団体も目立っていた。沖縄の歴史や平和学習を目的として訪れる修学旅行生に移動展を見学してもらうことも一案だろうと考える。³¹ お世話する旅行社への呼びかけも検討すべきだろう。

²⁹ 国立公文書館の中島氏は、国立公文書館で実施したアンケート回答には、「こんな施設があることを初めて知りました」という記述が少なからずあり、展示は「理解者」以前の「認知者」層を拡大することに寄与しているとも言えるとしている。中島康比古「国立公文書館における展示について」『北の丸－国立公文書館法－第36号国立公文書館』（国立公文書館2003）pp. 41-63

資料に関する情報等（展示をご覧になった見学者からの情報の事例）



南明治橋と思われる。戦前は木の橋だった。
現在の明治橋の位置よりも海側に架かっていた。
(70代以上 男性)



現在の様子
(左の建物は沖縄県立武道館)

展示No.74 明治橋
『明治～大正の沖縄の絵葉書』
明治～大正期
伝統工芸館首里琉染蔵
(T00022294B)

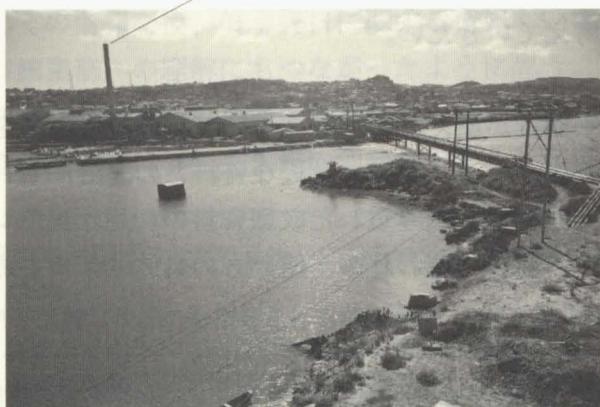


私の家が写っている

今の那覇市前島付近である。
(70代以上 女性)

展示No.91
那覇湯原の塩田風景
『沖縄県人物風景写真帖』 (T00015037B)

ベニヤ板工場の煙突
ストで従業員の1人が煙突に登り一昼夜程過ごした。



パイプライン
当初米軍は、川底を掘ってパイプラインを
通す予定だったとのこと。

展示No.132
建設中の奥武山陸上競技場
右下が陸上競技場部分。上にベニヤ工場が見える。
<琉球政府関係写真資料009>
1963年（昭和38）【002244】

兩岸に架かっているのはパイプライン。那覇港から船で運ばれた重油がパイプラインを経由し、浦添経由で米軍基地へと運ばれた。当時、写真に写っているパイプラインから兄と一緒に重油を抜き取って業者へ売り渡した。母から「大人だと射殺されるから幼い子供だったら撃たれることはない。女の子だと米兵も撃つことはない」といわれ、一人で抜き取りに行くこともあった。親の言葉とも思えないだろうが当時は生きるために戦果と称して米軍の物資を拝借した。パイプラインは現在の那覇大橋と明治橋の間にあった。当初、川底を掘ってパイプを通すはずだったが、工事を変更したのだろう、結局写真のようになった。潮が引くと、幼い子供達が魚を捕りに川に入ったりしたが、潮の満ち引きが分かりづらい場所で、いつのまにか川に取り残されるということもあった。中には溺れた子供がパイプラインを通すために掘った川底に引きずられて溺死し、数日後に膨らんで上がることもあった。対岸の学校へ行くのにパイプラインの上をよく通った。橋（明治橋？）を通るより15分ほど早く着くのでよく利用した。雨の時は滑りやすいので通らないようにした。（浦添市在住 女性）

(展示計画と導線)

会場の様子やアンケートから多くの人に展示を見てもらうためには、誰もが入りやすそうな雰囲気を作り、興味や関心へと向かわせる工夫が必要であると感じた。写真、地図、絵図、映像資料は、そのきっかけになった資料であった。入口に展示した空中写真や随時上映した映像資料は、通る人の足を止める効果があり、そこで入室する人と過ぎ去る人に分かれたが、当館認知への入口として目に止めてくれることもまた重要であると感じた。

当館の役割の説明と収蔵資料の利用促進のツールとして機関紹介展示パネルを展示ホール入口付近の壁面に掲示したが、そのまま通過する人が殆どのような状況だった。HP 体験コーナーも同様に利用は少ないように感じた。「見たい」、「利用したい」という気持ちに向かわせるような導線、配置、説明の方法に課題を残した。展示の導線としては、①呼び水として、分かりやすくインパクトのある資料で見学意欲へとつなげる。②一般に分かりやすく身近な展示テーマで資料を構成し、関心へと向かわせ、資料保存の重要性と利用してみたいとの意欲につなげる。③その役割を担う公文書館を紹介し、公文書館業務への理解へとつなげる。①、②が収蔵資料紹介展示、③が機関紹介展示である。先に資料の魅力と価値を伝えることで、その資料を永続的に保存し、利用させるための役割を担う公文書館への理解にもつながるように思う。³²

4-2 展示の見せ方

(展示の見せ方① - 身近な今との関わりの中で見せる -)

展示した写真資料や映像資料は、当時を知る人にとっては素直に共感できる資料である。逆に当時は知らない世代にとっては非日常の資料であると思うが、それを今の写真と対比させることで、現在との関わりの中で過去を認識し、各世代が共有できる資料にもなるように感じた。一方で課題としてあるのが文書資料の見せ方である。アンケート等からは、文書資料についての指摘はなかったが、「写真に興味を引かれる」「公文書館は文書を中心に扱う所だと思った」との回答から、文書資料の記録内容の魅力を引き出すことが充分でなかったと感じた。文書資料は、内容を読まないで理解できない点や特に見る人の興味に合致しなければよけいに見過ごされることが多い。展示の流れに沿って効果的に文書資料を見せる方法等を考えていきたい。³³

(展示の見せ方② - 利用方法を例示する -)

今回の移動展も、見学者数に比例して当館の来館者が増えたとはいえないが、資料の利用を促すために、それが一個人としてどう利用できるかを例示することで、身近な資料との認識にもつながるのではないかと考えている。例えば、これまで閲覧等で積み重ねた収蔵資料の利用状況やレファレンス等から資料がどのように利用されているか、資料の使われ方、使い方の具体的事例を紹介す

³⁰ 平和学習で訪れる修学旅行生に戦跡地の案内や講演などの活動を行う観光ボランティア団体がある。当該団体への呼びかけも必要だろう。

³¹ 当館では、毎年行事案内のポスター、リーフレットを作成し、広報しているが、各普及行事で作成するポスター、チラシの隅にも次回開催予定の行事案内を掲載することで、継続した広報活動になるようにも思う。

³² 前掲 鹿毛論文 p. 30 では、史料管理論的発想から「我々はこうやって史料を守っています。だから、皆さんも史料を大切にしてください」と訴えるのと、史料認識論的発想から「1点1点の史料からは○百年前のこんな面白い事実がわかります。だから、皆さんも史料を大切にしてください」と訴えるのでは、説得力が異なるとし、文書館の活動がなぜ行われているのか、なぜ重要なのかを伝えるためには、認識論により、各史料の持つ内在的魅力の説明から啓蒙が始まり、過去の人間社会の歴史の解明と未来への糸口のために史料を後世に伝えることの大切さの理解へと、スムーズに流れていくと述べている。

ることで、一個人としても社会にとっても必要不可欠な資料との意識も高まり、最終的には利用につながるのではないだろうか。実践したい方法の一つである。

(展示の見せ方③) - 沖縄県文書の展示、施策の検証 -

展示会場の百貨店の真向かいには県の本庁舎があり、県職員が会場に足を運ぶのも容易い位置にあった。呼びかけが不足していたのか県職員の見学者数が少ないことがアンケート結果にも現れていた。公文書館は、行政の一機関として県の歴史的な行政文書を継続的に収集・選別・整理し、それを永続的に保存、利用可能にする役割がある。その機能により、行政が県民への永続的な説明責任を保証し、県民がそれを検証する場としても存在していること。同時に行政にも寄与するための情報が蓄積されていることを展示の場でも表現する必要があるだろう。幅広い層の人が集まり、親機関である県庁舎も目の前であることから、日々蓄積される県文書の価値を官民共有の財産として認識してもらえそうな展示も試みる必要がある。³⁴ それは、公文書館の独自性を出す展示ともいえよう。³⁵

(展示の見せ方④) - 参加型、体験型の展示 -

博物館では、生徒の総合的学習の一環で、展示を調べ学習の教材として活用している事例がある。³⁶ 公文書館の展示でも試みる必要があるだろう。例えば、来場の際に展示資料についてのクイズ用紙を配布し、クイズに正解すると景品を手渡すなどがあっても面白い。見るという行為が自ら調べるという行為に変わった時、より資料の価値を実感できるのではないかと思う。³⁷

以前に当館の展示でも実践されたことだが、壁面に畳6畳程の首里城周辺の空中写真を展示し、その近くに壁面と同じ空中写真の縮小版を置き、写真に写された情報を自由に書き込んでもらったことがあった。事実の検証も必要だが当時を知る方々からの貴重な情報が書き込まれており、一資料には多様な側面があることを伺い知ることができた。

4-3 その他展示結果から

(公文書館友の会ボランティアについて)

展示準備（複製資料とキャプションの展示）と展示当番で友の会員4名のご協力があった。作業を通じての情報交換、展示資料に関する情報もいただき、展示活動を共に行うことで互いの親睦と公文書館業務への理解にもつながったように思う。友の会会則に「沖縄県公文書館の事業に積極的に参加して公文書館の発展に寄与するとともに、会員相互の教養を高め、親睦を図る」という目的がある。友の会は、公文書館の理解者でもあり応援団的な存在ということを改めて実感し、このよ

³³ 新聞記事や週刊誌などの見出しに見られるような読者の関心を抱かせるような方法も実践してみる必要があると思われる。

³⁴ 文書の引渡し状況にも左右されるが例えば、県の主要施策の起案段階から実施までを時間軸で構成・展示することで、施策がどう形作られたのかを検証（歴史の検証）することもできるだろう。それを通じて、施策（歴史）の証となる公文書の価値を認識し、その中で欠けている資料があれば保存の重要性への認識にもつながると思われる。

³⁵ 同時期に沖縄県立図書館でも「貴重書展」が開催された。「琉球大学附属図書館貴重書展」など、博物館以外の施設でも展示は行われている。資料が重なったせいか見学者からは、図書館と合同で展示を試みてはという意見もあった。扱う資料が沖縄の歴史資料という点では共通するが、公文書館の独自性を曖昧にしている点も否定できない。しかし、目的とする資料の所在を県民に周知できるようにするための資料保存利用施設間の連携が益々重要だろうと思う。

³⁶ 当館でも総合的学習で公文書館の活用を推進する事業を始めている。

³⁷ 移動展の試みとして職員からこのような提案があった。印象に残すという方法も良いだろう。多くの情報があっても記憶に残るのは限られている。余程興味の対象にならない限り印象には残りにくい。例えば機関紹介展示の中で保存処理の実演を見せることも印象として残りやすいだろう。

うな活動を続けていくことも公文書館の理解者層の拡大につながっていくと感じる。この場を借りて友の会会員の皆様に御礼申し上げたい。

(情報の活用)

展示した写真資料についての情報提供は当時を知る方の体験に沿った貴重な情報である。展示会のために労力をかけて作成した解説等も含め、収蔵資料検索のための資料の追記情報として今後どう活用していくかも課題の一つである。

(次回の移動展について)

平成 17 年度は、戦後 60 周年に合わせて「沖縄戦と戦後復興」と題した移動展を平成 16 年度と同じ場所で開催する予定である。アンケートにも戦後 60 年目を記念する展示会を望んでいる意見があった。時期に合わせた企画展示は、多くの県民が来場することが期待できる。この機会を好機と捉え、公文書館と収蔵資料についての理解と利用促進を図っていく必要があるだろう。

おわりに

当館は、開館して 10 年目を迎えようとしているが、未だ一般に公文書館の機能や役割が十分に認知されていないように感じる。県民に理解されるためにも普及活動を通して常に県民との接点を持ち続けることが必要だろう。

本稿を執筆するにあたり、展示に関する各論考を参考にしたが、ここでは報告が中心で、具体的な取り組み案を出すまでには至らなかった。また、興味や関心を持ってもらうことが、公文書館の理解にもつながるという一面的な内容に終始したのをご容赦いただきたい。以前、監査で公文書館の利用率の低さが指摘され、地元新聞でも利用に対してコスト高との記事が掲載されたことがあった。当館設置条例に、「公文書等を収集し、整理し、及び保存するとともに、これらの利用を図り、もって学術及び文化の振興に寄与することを目的に設置された」とあるように、利用率のみで評価するのではなく、県民の共有財産としての価値の評価も合わせて考慮するのが妥当だろう。しかし、その価値を理解してもらうために公文書館の収蔵資料が社会においてどう役に立つかを伝え、公文書館機能の理解にもつなげていく努力を続けていかなければならない。このような社会的背景にあって、益々普及活動の重要性は増している。

最後に、平成 16 年度移動展の準備では、館内外の方々の協力により実施にこぎつけることができた。感謝申し上げます次第である。

(参考資料)

- 1) 北川健「文書館のアイデンティティとそのイラスト表現」『山口県文書館研究紀要 第 17 号』(山口県文書館 1990)
- 2) 北川健「文書館のメインディッシュとディスプレイ」『山口県文書館研究紀要 第 18 号』(山口県文書館 1991)
- 3) 中野等「文書館(史料館)における「展示」業務」『記録と資料 第 2 号』(全国歴史資料保存利用機関連絡協議会 1991)
- 4) 栗山欣也「史料の保存と活用ー図書館・博物館そして文書館ー」『文書館紀要 第 9 号』(埼玉県立文書館 1996)
- 5) 森本祥子「アーキビストの専門性ー普及活動の視点からー」『史料館研究紀要 第 27 号』(史料館 1996)
- 6) 柴田知彰「記録史料の展示に関する一試論」『秋田県公文書館研究紀要 第 3 号』(秋田県公文書館 1997)
- 7) 柴田知彰「企画展 県庁文書で見る秋田の鉄道史ー公文書館の展示における一実験例ー」『秋田県公文書館研究紀要 第 4 号』(秋田県公文書館 1998)
- 8) 白井哲哉「文書館普及活動における二つの試み」『文書館紀要 第 11 号』(埼玉県立文書館 1998)
- 9) 西向宏介「広島県立文書館における展示活動の課題」『広島県立文書館紀要 第 5 号』(広島県立文書館 1999)
- 10) 久部良和子「公文書館の利用と普及(移動展の役割)ー八重山・名護・宮古の事例よりー」『沖縄県公文書館研究紀要 第 2 号』(沖縄県公文書館 2000)
- 11) 鹿毛敏夫「文書館展示のアイデンティティー記録史料展示の理論と実践ー」『史料館研究紀要 第 6 号』(大分県立先哲史料館 2001)
- 12) 独立行政法人国立公文書館『アーカイブズ ARCHIVES 第 11 号』(2003)
- 13) 独立行政法人国立公文書館『アーカイブズ ARCHIVES 第 12 号』(2003)
- 14) 豊川公裕「文書館展示のあり方ー千葉県文書館企画展を例にー」『平成 14 年度公文書館専門職員養成課程修了研究論文集』(独立行政法人国立公文書館 2003)
- 15) 中島康比古「国立公文書館における展示について」『北の丸 国立公文書館報 第 36 号』(独立行政法人国立公文書館 2003)
- 16) 石川武治「博物館との複合館における普及活動ー茨城県立歴史館における史料紹介展と史料体験講座ー」『平成 15 年度公文書館専門職員養成課程修了研究論文集』(独立行政法人国立公文書館 2004)
- 17) 山田英明「文書館における展示業務に関する一考察ー平成 15 年度歴史資料展を事例としてー」『福島県歴史資料館研究紀要 第 26 号』(財団法人福島県文化振興事業団 2004)
- 18) 水石理也「群馬県立文書館における学校向け資料集作成の試み」『平成 16 年度公文書館実務担当者研究会議資料』(2005)